

笠置磨崖石佛小考

川 勝 政 太 郎

南朝の史蹟として知られる洛南笠置山には古くより笠置寺が存し、山上に露呈する花崗岩の大巖面に彫刻された彌勒石・文殊石・薬師石・虚空蔵石と呼ばれる磨崖石佛を核心としてその寺觀を誇つてゐたが、彌勒・文殊・薬師の三佛は昔時附屬の建築があつたため、元弘の兵燹の際火焰に巖面焼損して尊容を減したと言ふ。現在では彌勒石に巨大な舉身光式の彫凹めが残存してゐるのみであるが、虚空蔵石は少し位置も離れ且つ露佛であつたので焼損を免れたと傳へ、今にその偉大な磨崖佛は仰ぐ者をして渴仰の念を起させてゐる。

此等の大石佛は我國石佛中に於ける注目すべき造像であつて、此等について論じたものには、西村貞氏の「南都石佛巡

禮」(昭和四年)、「京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告」第十一册(昭和五年)の佐藤虎雄氏「笠置山の史蹟及名勝」(本誌第七六號)和

村の岩周東氏「笠置寺石佛古圖」(ついで、「建築史」第一卷(昭和四年))の足立康博氏「笠置寺彌勒像と笠置磨崖石佛」が

あり、中でも足立博士論文は彌勒石佛の像容及びその絶對年代に就いて従來の説を正されたもので、最も注意すべきものであつた。私も今まで二三これに觸れたことがあるが、補訂すべき點もあるので、この小考に於いて磨崖佛を中心としての笠置寺について、なほ若干の追究を試みやうとするものである。博雅の御叱正を得ば幸である。

一、笠置寺の説話

笠置寺の草創については、古く「今昔物語」に次の如き説話を、「天智天皇御子始」笠置寺一語なる標題の下に收めてゐる。

天智天皇の御代、皇子この山に狩獵し給ふた時、山中に鹿を追ふに鹿は高き岸より轉び落ち、皇子の乗馬は危ふく巖頭に踏み留つたが進退窮し、皇子この場に馬と共に死せんことを歎き、山神我が命を助け給は、此の巖のほとりに彌勒像を刻み奉り、人の祈り給へばその験を得たので、皇子は目印に蘭

笠をぬぎ置き、一兩日後再び登山してその巖に像を彫らんとされると、黒雲天を蔽ひ天人現はれて忽ち彌勒の像が彫り上げられた。其後良辨僧正この彌勒像を見出して笠置寺を造營したといふことが書いてある。

「八音物語」は大體平安末期に著はされたものと考へられてゐるのであるから、既に平安時代には斯かる笠置寺の説話が世に行はれてゐたことが知られる。しかし、天智天皇の御代にこのやうな事情で彌勒石佛が造られたか否かは、その當時の文獻には見えぬことであるから確認することが出来ない。寧ろこれは笠置寺なる名稱を説明するために作り出された一説話であると考へねばならない。

然らば此の説話が何故彫像を天智天皇の御代としたものかその據所を考へ難いが、「帝王編年記」は「天智天皇三年甲子、天人降造笠置石像彌勒」として年代を限定し、更に天文七年の奥書ある寺藏「笠置寺縁起」には皇子を天武天皇即ち大海人皇子と定めてゐる。此等も亦何を根據としたものか知り得ぬ。しかし、我國に於いて彌勒信仰の流傳を見たのは道昭・智通・智達等が唐より傳へた法相宗によるもので、天智天皇の御代以後である。従つてこの説話は我國彌勒信仰の初頭に笠置彌

勒像が造られたものとして、その來歴の古きを誇らんとしたのであらう。天智天皇六年には大津京に於いて崇福寺が建立され、その金堂には丈六の彌勒坐像を安置した。このやうな所に天智天皇御宇とする據所を求めたのかも知れない。

なほ「縁起」では、皇子が再び登山し給ふた時、一羽の白鷲が現はれて先に置き給ひし御笠の在所を示したと言ひ、鹿鷲山笠置寺の號を附會説明してゐる。しかし、「延喜式」卷三十九内膳司に「相樂郡鹿鷲園」より箬竹を徵用することを記し、笠置の地名としてはこの鹿鷲の文字によつて見えるのが一番古いことになる。

二、彌勒石像と文獻

さて笠置寺の草創について考へるには、彌勒石佛が寺の中心となつたものであること疑ふ餘地がないから、石佛の様式手法を尋ねてその年代を推定する方法もあるが、前記の通り今は舉身光式の彫削めを残すばかりで、像容の片姿さへ見られないのである。

然しながら、こゝに笠置寺彌勒石佛の像容を窺ふべきものに、大和大野寺の彌勒大磨崖佛がある。周知の如くこの石佛

は「興福寺別當次第」に「傳法院領大野郷之内削平磐石牛腹、奉彫彌勒立像、蓋笠置石像以爲規模」と見え、承元三年に供養が執り行はれたもので、笠置彌勒はこれ以前に存したことも知られ、且つその像容もこれによつて推察し得るとされてゐた。ところが大野寺彌勒について見るに、如來形の立像の佛體はいかさま古調を存するかに拜されるけれども、蓮座が謂はゆる踏割り式となり兩足下にそれ／＼一つ宛の蓮座を現はしてゐる。この踏割り式は多く鎌倉時代に入りてより行はれるものであるため、笠置像は大野像より些して古からぬものとし鎌倉初頭頃に作られたものであらうとする一説もあつたが、この踏割蓮座の問題は足立博士が前掲論文によつて明快に解決された。即ち康和三年頃に作られた「彌勒菩薩畫像集」に笠置彌勒像の圖が載せられて居ることを指摘し(第一圖)、

一、「彌勒菩薩畫像集」に見ゆる笠置彌勒像



その蓮座は一つの大蓮座に描かれてゐることを示され、従つて大野像は笠置像を模しながらも細部には鎌倉時代の好尚が取り入れられたと解釋されたのは誠に卓見である。同時に、笠置彌勒の確實なる存在はこの平安後期の康和頃にまで溯り得ることを示して在來の知見を數歩進められた。

現在では右の康和頃以前の文獻を求め得ない。これよりやゝ後ではあるが、藤原宗忠の日記「中右記」に元永元年閏九月廿六日女房等を作ひ京都を出發し、廿七日に木津川を溯り笠置に登山したことが見えてゐる。

廿七日、……已着笠置津……自此寄舟登坂……登坂十町許、

參着彌勒石像前、先供養經、以兼禪已講爲講師此寺別當也、題

名僧十口、人々經合五部、此外八名經心經阿彌陀經十卷、

則事了、給被物布施、又誦經、心中所願何者、先帝聖靈、

過去雙親、所生五女、共生慈尊出世之時、皆逢法華演說之

日、遂知今日之願互成歡喜之心、又今日相具所參詣、初從

妻子奴婢、及于田夫牛馬、皆逢三會之曉、悉結一乘之緣、

此趣令啓白、且致祈念、且行禮拜、事了暫留僧房……

笠置彌勒石像を親しく禮拜した文獻としては、これが私の

檢出し得た一番古いものである。以下は從來より知られてゐ

るものであるが、参考のため記しておかう。「本朝世紀」の久安五年五月十二日の記事、これは得長壽院修理に當り佛像を堂外に移すことの可否について左大將雅定等が反對した言に

東大寺大佛新以開眼之後、烏雀犯之、笠置彌勒加彩色之後、
靈驗惟少、准此等例更不可動

とあり、これ以前に笠置彌勒石像に彩色を施されたことが知られる。これに次いで藤原長兼の日録「三長記」元久三年四月十二日の條に次の通り見えてゐる。

……次參御喪家、謁中將定家朝臣、昨日向笠置、奉爲故殿
自書寫法華經一部彌勒上生經等、於彌勒御前供養、解脫上
人爲導師……

以上の如く笠置彌勒石像の存在は平安後期以降の文獻により明らかであるが、その絶對年代としては「彌勒菩薩畫像集」撰述の康和頃を得るに留まる。

三、寺の草創と彌勒像

彌勒石像の存在を證據立てる文獻は前節に擧げた通りであるが、笠置寺の名の見えるものは更に溯ることが出来る。その最も古いのは「東大寺要錄」別當章大法師玄津の條に「元慶

元年笠置寺八講始行」と見えるものであらう。これに次いで「百練抄」にあるものが知られてゐる。

永延元年十月十七日院參詣長谷寺笠置寺七大寺

と花山院の笠置寺御參詣を記してゐる。「百練抄」は鎌倉後期の撰であるが、古い日記の抄録であるから、これは信憑し得るであらう。この頃の人清少納言の「枕草紙」にも「寺は壺坂、笠置、法輪……」と書き、既に著名の寺であつたことが想像される。なほ藤原道長の日記「御堂關白記」寛弘四年六月に

八日、壬寅、參笠置寺、此夜流星數多、至曉流云々

とあるのを檢出し得た。此等は何れも寺名を擧げるのみではあるが、彌勒石像が本尊であつたのだから、笠置寺に詣でたのは彌勒を禮拜するためであつて、石像のことは記さずともその存在を確認して誤なからう。平安中期の時尙ではあるが、特に道長は彌勒信仰に厚かつた人で、寫經を埋めて彌勒出世の機に備へんとした有名な吉野金峯山經塚を同じ寛弘四年八月に營んだことを思ひ合せば、道長の笠置寺參詣の意趣がおのづから想察されるのである。

始めに記した如く我國に於ける彌勒信仰は法相宗によるものであつて、法相宗は無著菩薩が兜率天にて彌勒より唯識

の教義を傳へたるに起ると言はれる。「今昔物語」の説話に良辨僧正が笠置山上に彌勒像を見出して寺を造營したと言つてゐるのは甚だ示唆に富める言である。良辨僧正は始め義淵について法相の宗義を學び、後更に慈訓に従つて華嚴の奥旨を受け、東大寺建立せられるや初代の別當に補せられた。且つ又、良辨が彌勒菩薩の化身であるといふ傳があるのは、法相を極めて彌勒信仰の深い念を藏してゐたことを思はしめるものであり、その良辨が彌勒を本尊とする笠置寺を造營したことは有り得べきことである。當寺が古く東大寺の末寺であつたことは「東大寺要録」末寺章にその名が見えることでも知られるが、なほ前引の「中右記」に「以兼禪已講爲講師此寺別當也」とある笠置寺別當たる兼禪も「中右記」に康和頃から活躍してゐることの見える東大寺の僧であつたことは、當寺と東大寺との關係が極めて密接であつたことを示してゐる。このことは良辨の笠置寺造營によつて作り出されたものと信じ得るのである。そこで再び「今昔物語」の説話を味ふに、天智天皇の御代皇子出獵のことは石像の神秘性を語らんとする潤色に相違ないが、良辨との關係は事實を傳へてゐると見てよいと思ふ。斯くの如く良辨の時笠置寺が存在したと見るとして、彌勒

石像がそれ以前に作られてゐたかどうかと言ふに、私はこの場合寧ろ石像の造顯と寺の造營を同時のものと考えへる。彌勒信仰を宗本とする法相を學び、しかも彌勒菩薩の化身とも言はれた良辨が、奈良に近き笠置山上の大巖面を見て神秘の心を動かし、彌勒の像容をこゝに刻んで笠置寺を開いたとするのは最も妥當性に富むものと思ふ。果して然りとせば、笠置寺の草創即彌勒石像の造顯年代は奈良時代末期天平乃至寶龜の頃に求め得るわけである。

因みに田中重久氏は「夢殿」第十八冊の「平安後都以前の寺址と其の出土瓦」中に笠置寺出土の軒丸瓦片(鈴木吉治氏藏)を圖示してゐられるが、奈良末期のもの認められる。

以上述べ來つた如く私は笠置寺彌勒石像の造顯が古く奈良末期にあつたと見るものであるが、我國石佛彫刻として恰もこの頃に作られたものに大和榮山寺に近き宇智川畔の磨崖石佛が現存してゐる。この宇智川石佛は觀音立像と思はれるもので僅か高さ二尺許の線刻に過ぎないけれども、同じ巖面に刻まれた經碑文に寶龜九年の紀年を有し、當時露呈せる巖面に石佛を刻むことの行はれた證左を示すものである。このことは我國に於ける創始ではなく、當時の學問僧が大陸支那に

於いて見聞した磨崖石佛造顯の知識の移入にかゝることと言ふまでもない。

笠置寺彌勒石像は高さ五十二尺幅四十二尺の大巖面に舉身光式の彫り凹めを作り、その中に彌勒如來立像を線刻されてゐたものである。古來、五丈の石像と稱してゐる。宇智川石佛とは比較にならぬ巨大なものである。今惜しいことに尊容を見ることが出来ぬが、斯かる磨崖石佛が奈良末期に作られた紀念的な遺蹟として、石佛彫刻史上貴重な存在である。眼を閉じて大野寺彌勒大石像を念裡に浮べ、これを笠置山上に仰げば中世の彌勒信仰の人々の渴仰のほどが想像せられるであらう。

四、虚空藏石の菩薩像

笠置山上にはなほ文殊像を刻んだと言ふ高さ二十二尺幅十六尺の文殊石、藥師像を彫つたと傳へる高さ四十尺幅三十一尺の藥師石、更らに金胎兩部曼荼羅を刻したと言ふ高さ四十八尺幅二十七尺の金剛界石及び高さ四十尺幅三十三尺の胎藏界石があるが、何れも痕迹を認め得ぬのみならず、文獻上にも求めることが出来ないので果して實際に彫刻されてあつた

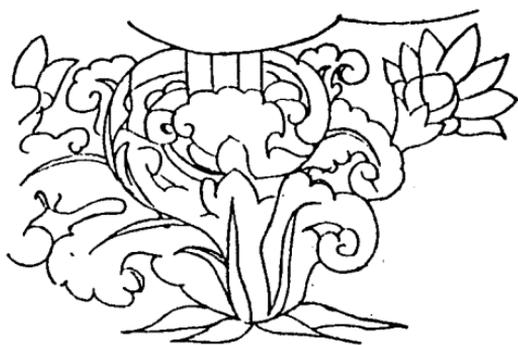
かどうかも確かでない。しかし虚空藏石のみは今も優麗の尊容を鮮明に残してゐるので、以下それについて述べることにしたい。

この虚空藏石の位置は彌勒石から全く隔離されたところにあり、ために火害を免れたと言ふが、前方は僅かの山道を残して斷崖に臨み、禮拜のためには餘り適當な場所ではない。笠置山石佛としては第二的な待遇を受けて居り、造顯年代もおくれるものと見るべきである。高さ四十二尺幅二十四尺

二、笠置虚空藏石全景



三、虚空藏石蓮座飾部分見取圖



の巖面に擧身光式の彫凹めを作り、その中に線刻せるもので、總高約三丈に餘る

ばかりの雄大な磨崖佛である(口繪及第二圖)。尊容は蓮座上に跏趺する菩薩形坐像で頭上には寶冠を頂き、胸に瓔珞を飾り、光背は二重回光とする。寶冠正面には優雅な寶相華文を刻出して居り、蓮座は廣潤な單瓣蓮瓣を以てし、且つ池中より

間にして知るところがない。寺傳に弘仁年間弘法大師登山して本像の前にて虚空藏求聞持法を修したといふのは、縁起上の潤色に過ぎまい。

なほ寶相華を以て飾れるこの蓮座の形式は誠に珍らしいものではあるが、既に奈良時代後期の奈良市頭塔石佛に於いて類似の意匠が見られる。但し頭塔のは左右相稱圖案であるに對し、本像のは自由に變化を見せて居り、意匠の性質には平等院鳳凰堂の裝飾文様などに通じるものがある(第三圖)。

ところで、本像を圖像的に見てこれを傳承の如く虚空藏像と認められるであらうか。彫像は寶冠・瓔珞を飾れる菩薩形であるけれども、兩手には何等持物を執らず、右手は擧げて指頭を捻じ、左手は膝に垂れてゐるのであつて、虚空藏菩薩としての特徴を見出すことが出来ぬやうに思ふ。のみならず持物なき斯の如き菩薩形はその尊名を定めるに困難を感じるのである。私は寧ろ本像をも彌勒像と認めたい。彌勒は兜率天上にある菩薩であるが、釋迦佛滅の五十六億七千萬年後に如來の資格を有つて此世に現はれると信じられた補處の菩薩であつて、古くより如來形にも菩薩形にも造られたこと例證を引くまでない。彌勒の菩薩形は儀軌の上よりすれば持物を

生じた蓮華なることを表現するため中央下方には莖を立てこれに寶相華様の見事な唐草を纏綿させてゐる優麗さは比類稀なものである。面相亦回滿で、しかも極めて洗練された像容を示してゐて、密教圖像を巖面に見る思ひがある。その寶冠飾、蓮瓣の形、さては莖を飾る寶相華の彫刻には多分に藤原藝術の香がある。かたゞ私は本石像は平安後期の頃に刻彫されたものであらうとするが、この石像についての文獻は寡

有つて居り、本像の如きは求め得ないけれども、當來佛としての彌勒菩薩であるとすれば、如來と同様に持物を執らず且つ寶冠・瓔珞に裝身して菩薩としての姿を示してゐる點は、彌勒菩薩とするに都合がよいと考へるのである。斯く見るとが許されるとすれば、本尊たる根本彌勒石像は如來立像に現はされてゐたが、後にこの菩薩坐像としての彌勒像が追造されたことになるわけである。彌勒の靈場笠置山上にこの如來・菩薩二様の大石佛が中世並び存したとしても敢えて矛盾

光悦の逸話は嘘

近世の三筆といつて、近衛三貌院、木阿彌光悦、松花堂昭乗の三人の名が傳へられてゐる。これについて續近世畸人傳等の傳へる或時近衛三貌院殿、光悦にたづね給ふ、今天下に能書といふは誰とさかするぞと、光悦、先づ、さて次は君、次は八幡の坊也と、藤公、その先は誰ぞ、と仰せ給ふに、恐れながら私なりと申すといふ話も人口に膾炙してゐる。しかしこの話は事實あつたもので

するところはないと思ふのである。

ともあれ、本像は我國石造美術史を飾る線刻磨崖石佛の古遺物として、かの豊後臼杵附近の陽刻磨崖石佛等と共に指を屈すべきものであるが、寧ろその巨大さと典麗さに於いては本邦石佛中に冠たるものと稱して差支あるまい。根本彌勒如來像を焼損したと雖も、この菩薩大磨崖佛を今も明媚の山上に拜し得ることは、それだけでも我々の絶大な喜びである。

(昭和十七年一月稿)

なく、後代王僧虔の逸話を本にして捏造したものである。王僧虔の逸話は宋の蘇易簡の文房四譜筆譜に

王僧虔博く經史に渉る、兼く草隸を善くす、齋の太祖、虔に謂つて曰く、我書卿とは何如と、虔曰く、臣正書第一、陛下草書第二、正書第三、臣に第二無く、陛下に第一無しと、

とあるものは是れである。かくの如き近世の事でも所謂傳説に覆はれ眞を見難い。況や上世のこゝ餘程の省察を加へなければ誤ること多いであらう。

(苞桑子)